章Ⅲ　カストロプ動乱

カストロプ星系を巡る状況が一転したのは、ウジーがマリーンドルフ伯爵家にヒルダを訪ねてから数日後のことだった。

まず、マクシミリアン・フォン・カストロプの説得のために、カストロプ星系へ赴いたマリーンドルフ伯爵フランツが、マクシミリアンに会うこともできないままに身柄を拘束されたとの一報が帝国中を駆けめぐった。

マリーンドルフ伯爵による説得が、動乱回避への最後の望みと受け取られていただけに、帝都ではマクシミリアンが帝国に向かって公然と反旗を翻す意思を露わにしたものと受け取られた。

「これでいよいよ、カストロプ侯爵家も終わりだな」

「あっさり頭を下げておれば、食うに困るどころか、帝国有数の大貴族として家門と面目を維持できたことでしょうに。愚か者ではありますが、この際、帝国の財政としては干天の慈雨をもたらしてくれたことに感謝すべきかとも思いますな」

国務尚書リヒテンラーデ侯と財務尚書ゲルラッハ子爵の交わした会話はごく事務的で、動乱の短期間の鎮圧とカストロプ侯爵家の私産公収による財政状況の改善を疑わないものだった。帝都から定期宇宙船で一週間足らずの位置にあるカストロプ星系は辺境星系ではないが、その私有軍隊は一〇〇〇隻単位でしかない。マクシミリアンがどれほど血迷っても、帝国軍が短期間に侯爵軍を撃破するに違いなく、所詮はコップの中の嵐でしかない。リヒテンラーデ侯を初めとする帝国政府の首脳はたかを括っていた。

この時期、帝国軍は叛徒領に対する大規模な侵攻作戦を実施中である。総指揮官は、つい先日ローエングラム伯爵家を嗣いだばかりの上級大将ラインハルト・フォン・ミューゼル。二万の艦隊を動員し、イゼルローン回廊を越えて叛徒領に深く踏み込む作戦を展開している。帝国政府の関心の大きな部分は、ラインハルトの遠征の成否に向けられていたと言っていい。

ラインハルト個人への感情から言えば、あの生意気な金髪の孺子が馬脚を現して惨敗して帰ってくることへの期待がある。しかし、政府の要人としては二万の艦隊が大損害を受けた時の、今上帝フリードリヒ四世の治世への打撃を考慮せねばならず、実力もない若造に無理な遠征を実施させたことへの責任追求と、巨大な財政的ダメージを覚悟しなければならないのである。と言って、ラインハルトに大勝利を掴まれれば、形だけでも賞賛を以て迎えねばならず、彼に反感を持つ門閥貴族の領袖からは、言語化した、あるいは言葉にならない不平と不満と不快感をぶつけられることになる。それはそれで、国務尚書たるリヒテンラーデ侯や帝国軍艦隊を指揮するミュッケンベルガー元帥としても愉快さとはほど遠い。

「適当なところでお茶を濁して帰ってこい」

それが多くの帝国政府と帝国軍首脳の本音であっただろう。必然的にカストロプ動乱への関心は低く、万一にも第一次鎮圧部隊が失敗した際の緊急対策（コンティンジェンシー・プラン）も用意されていなかった。

一方――

「やっぱりやってくれたわね、マクシミリアン・フォン・カストロ

プ……」
　報せをもたらしたミハエルに、マリア・アントニアはさすがに唇を噛みしめて絶句した。
「せめて会うくらいはすると思っていましたけれど。もう、完全に見境をなくしてしまったもののようですね」
「しかし、これでカストロプ侯爵家は完全に帝国を敵に回しました。シュムーデ提督が任務部隊を率いて出撃するそうですし、これで動乱は収まるんじゃないでしょうか」
「そうなら良いですけれど、追い返すのではなくてマリーンドルフ伯爵を拘束したのは気に入りませんね。マクシミリアンは愚かだけれど、まったくの馬鹿ではないし、シュムーデ提督も余り良い評判を聞かない人ですからね。そんなことは起きて欲しくないけれど、わたくしとヒルダを、あなたに守ってもらわなければならない事態が起きる可能性も出てきます」
「俺……いえ、小官が伯爵夫人を――？」
「ええ、お願いしたでしょ？ 護衛をしてくれ、と」
「誰が一体、伯爵夫人を……」
　言い止し、唐突に生じた理解にミハエルは言葉を飲み込む。
　シュムーデ提督がカストロプ侯爵領を制圧し、マリーンドルフ伯爵を救出できれば、なにも問題は起きない。しかし、マリア・アントニアは言わなかったか。シュムーデ提督については良い評判を聞かない――と。この銀髪の貴婦人の顔の広さは半端ではない。五〇〇〇家を超えると言われる上級貴族の当主の過半は、この人に対してカードでの借金を負っているらしい。
　頭の中の人名録を繰ってシュムーデ提督のページを探し当てる。士官学校卒業以来、だてに二年間も副官職はしていない。シュムーデ提督を初めとして、カストロプ動乱鎮圧部隊指揮官候補者は一通り調べて頭にたたき込んであるのだ。
　マリア・アントニアの言う通りだった。シュムーデ提督の用兵能力は、その宮廷、および軍上層部の遊泳術に較べると圧倒的に評価が低い。特に敵を侮りやすく、一方的な思いこみで硬直した戦術に固執しがちという辛辣な噂まである。今回も鎮圧を楽勝と見做して、鎮圧後の略奪を目当てに、要路に工作して指揮官の地位を入手したに違いない。
　もし、シュムーデ提督の部隊がカストロプ侯爵軍に敗北し、動乱の鎮圧に失敗したとすれば……それに、今は時期が悪い。先に述べたように、ローエングラム上級大将による大規模な遠征の実施中。ラインハルトの動員した兵力は、全一八個艦隊を擁する帝国軍宇宙艦隊の一部に過ぎないとは言え、遠征距離はイゼルローン要塞からでも一〇〇〇光年を超える。そして、艦隊の遠征費用は、遠征距離の自乗に比例するとさえ言われている。兵力ではなく、費用的に大きな艦隊をカストロプ星系へすぐに向けるのは難しいのではないか。
　仮定に仮定を重ねてもしようがないが、シュムーデ提督が敗れ、慌てた帝国軍が同規模の任務部隊をカストロプ星系へ向けたとする。この第二次部隊までが敗れるようなことになったら、カストロプ侯爵軍は、マクシミリアン・フォン・カストロプはどう動こうとするだろうか。カストロプ星系の隣接恒星系はマリーンドルフ星系。そして、その領域の領主は拘束されてカストロプ星系にあり、しかも両家は縁続きと言うではないか。
「カストロプ侯爵家……ですか、伯爵夫人」

「大きな声を出さないの、タウゼントシュタイン中尉。どこに耳があるか分かりませんよ」
　ぴしりと言われて、ミハエルは首を竦めたが、マリア・アントニアの目が肯定の色を浮かべて頷いているのを確認する。そこまで先手を打ってくるほどマクシミリアン・フォン・カストロプが賢明なら、動乱も起きなかったかも知れないが、悲しいかな、人間、働く知恵の方向性というのは理想からはほど遠いのが普通だ。
「分かりました、伯爵夫人」
「護衛対象のメインはヒルダ。わたくしは添え物のようなものと考えてくださいな。でも、あなたのガールフレンドが良くやってくれたから、大きな問題は起きないでしょう」
　ミハエルは真っ赤になった。
「ウ、ウジーは別に俺の……いえ、小官のガールフレンドでは……単に同郷で、たまたまあんな事件があったので……」
「おやおや」
　心底おかしそうにマリア・アントニアは笑う。この若者よりも約半世紀、彼女は人生の経験に於いての先達たる身である。二〇歳を過ぎたばかりの若者が、あの健気な少女にどんな感情を抱くかぐらいは、カードを読むよりも容易かった。
「それで、護衛のことはどうなのかしら？」
「は、はい、誓って微力を尽くします。念のためですが、マリーンドルフ伯爵令嬢のご所在地は教えておいていただけますか」
「良くできましたよ、中尉。ええ、万一の時はよろしくお願いするわね」
　ミハエルの予想は最悪の形で適中する。
　マリーンドルフ伯爵拘束の報を、カストロプ侯爵家からの宣戦布告と見做した帝国はシュムーデ提督に出撃を命じ、二五〇〇隻にも及ぶ鎮圧部隊は帝都を発して行ったのだが――
　『鎮圧部隊壊滅、シュムーデ提督、戦死』の報が帝都を震撼させたのは、その一〇日後のことである。シュムーデ提督の余りに無様な敗北ぶりに帝国軍首脳が責任の追及を恐れたためと言われているが、戦闘詳報が廃棄されてしまったため、マクシミリアン・フォン・カストロプが帝国軍を迎え撃った戦術は後世に伝えられずに終わる。マクシミリアンの父である故オイゲン・フォン・カストロプが、フェザーン経由で密かに戦闘衛星システムを叛徒領から密輸入して装備していた、あるいは反射衛星を使った要塞砲システムで、強引に着陸を試みた帝国軍艦隊を上空から狙撃した、など諸説が伝えられるが、いずれが真相なのかは明らかになっていない。分かっているのは、シュムーデ提督が失敗し、カストロプ動乱は鎮圧どころか拡大の方向を見せ始めたことだけだった。
　この間、ローエングラム上級大将の指揮する二万隻の帝国軍艦隊は、アスターテ星系で四万隻の叛徒軍艦隊と交戦し、その過半を一方的に撃破するという大勝利を博している。アスターテでの大勝利が声高に喧伝されたこともあり、カストロプ動乱が帝都内で詳しく報じられることはなかったが、これが逆に帝国軍の手を縛ることになった。
「ローエングラム伯爵は敵の半分の兵力で、倍する敵をほとんど全滅させたではないか。あの生意気な金髪の孺子にしてできたのだ。以降、少数で多数を破れないとなれば、これは指揮官の無能を示す

ものと言って良いだろう」
　無責任極まる言説が大手を振って宮廷を席巻し、それだけならまだしも帝国軍に対しては皇帝の名での叱責が与えられた。優勢な兵力を動員し、十分な準備も整えていたはずのカストロプ動乱鎮圧軍が一方的に破れるとは何事か。シュムーデ任務部隊を超える兵力を動乱鎮圧に向けるというのであれば、帝国軍首脳は辞表を懐にすべきである。ローエングラム伯爵を見習うがよい――と。
　ラインハルト・フォン・ミューゼルことローエングラム上級大将が耳にすれば、その愚かしさに憫笑を禁じ得なかったに違いない。少数で多数と戦うのは戦略の邪道である。彼は少数で多数を破れるよう手を打ち、工夫し、麾下将兵を鼓舞して戦った。大勝利とは言え、最終段階では手痛い反撃も受け、艦隊の一割強に達する損害も被ったのである。彼我の兵力比を反転させることができていたならば、この損失は一〇分の一に減っていたことだろう。
　が、ローエングラム伯ラインハルトがカストロプ動乱鎮圧作戦の不手際を難じるにせよ、彼はまだ帝都から数千光年の彼方、アスターテ星系からイゼルローン要塞への帰路にある。帝国軍は、カストロプ動乱鎮圧に片手を縛られた状態で向かうしかなかったのだ。
　準備不足のまま、急遽第二次鎮圧部隊二〇〇〇隻余りが編成され、カストロプ星系へ送られたのが、さらにその一五日後のことである。「シュムーデ提督が敗れたにも理由があるはず。今少し、カストロプ星系の状況を確認し、十分な兵力を準備すべきではないか」
　そういう声もなかったわけではないが、皇帝の名で『シュムーデ隊を超える兵力を投入してはならぬ』と言われてしまってはどうにもならなかった。
　五日後、第二次鎮圧部隊もまた首将を失い、無惨な敗残の姿をさらして帝都へと帰還すると、さらに事態は展開する。
　マクシミリアン・フォン・カストロプが正式にカストロプ侯爵家継承と同時に、隣接するマリーンドルフ伯爵領のカストロプ侯爵領への併呑を宣言したのだ。
『我がカストロプ侯爵家とマリーンドルフ伯爵家は相携えて、帝国の君側の奸を除き、カストロプ・マリーンドルフ連合王国を樹立するものである。伯爵には、この時あるを見込み、あらかじめ当星系に滞在いただいている。すでに、マリーンドルフ伯爵からの同意は得ていることを、併せ宣言するものである。帝国万歳』
　マクシミリアン・フォン・カストロプの演説は一般映像回線には流されなかったが、ミハエルは帝国軍が受信した映像を、唖然として見守ることになった。つまり、このしまりのない輪郭の、時代錯誤なコスプレ……かどうか、ミハエルには判断できなかった……の男は、最初からこの目的でマリーンドルフ伯爵の来訪を受けいれたということなのか。
　帝都中が息を潜めてマリーンドルフ伯爵家の反応を見守った。マクシミリアンが言う通り、マリーンドルフ伯爵は動乱勃発直前にカストロプ星系へ赴いている。拘束された、と伝えられたが、実は暴挙に協力すべく、敢えてマクシミリアンのもとへ向かったというのだろうか。いずれにしても、隣接するカストロプ星系が実力での併呑を企ててくれれば、当主を失った伯爵家が抵抗する術は少ないのではないか。
　マクシミリアンの宣言に対する、マリーンドルフ伯爵家からの応答が再び帝都を驚かせたのがその翌日だった。

「わたくし、ヒルデガルト・フォン・マリーンドルフはマリーンドルフ伯爵家の当主代行として、マクシミリアン・フォン・カストロプからの無法な要求への拒否を宣言いたします」
　マリーンドルフ伯爵の一人娘であるヒルデガルトが自ら宰相府に赴き、帝国政府に対して正式にマリーンドルフ伯爵の救出、および予想されるカストロプ侯爵軍に対するマリーンドルフ星系の防衛支援を要請したのである。同時に、ヒルダはマクシミリアンにも正式の拒否回答を通告する。
『ヒルデガルト・フォン・マリーンドルフに伯爵家を代表する権限はないはず。彼女が伯爵家当主代行を務めるには、正式に当主からその旨の届け出が為され、典礼省での手続きが終わっている必要があるはずだ』
　それがマクシミリアンの反応だったが、帝国政府はヒルダの要請を受領した。
「マリーンドルフ伯爵フランツ卿がカストロプ星系へ出発する前に、ヒルデガルト・フォン・マリーンドルフへの当主代行手続きは行われている。典礼省へのヒルデガルト・フォン・マリーンドルフの出頭と認証も同日の内に行われており、伯爵が伯爵領の無血併呑を了承したとするカストロプ一族の主張には根拠がない。帝国政府はカストロプ一族が無法にマリーンドルフ伯爵を拘束し、その所領を冒す企てを行っているものと認め、支援のための措置を実施する旨を決した」
　カストロプ侯爵軍約一二〇〇隻がマリーンドルフ星系へ押し寄せたのはその三日後。すでにヒルダの名で動員が行われていたマリーンドルフ伯爵軍と帝国軍の辺境警備艦隊約八〇〇隻が、マリーンドルフ星系の外縁部でこれを迎え撃った。当初、兵力に勝るカストロプ軍が優勢と見られたが、小惑星帯や外惑星環などを巧みに利用することでマリーンドルフ軍も善戦を続け、主星への侵入を辛うじて食い止め続けた。
　とは言え、カストロプ軍はその後も兵力の増援を続けており、マリーンドルフ軍がそう長くは抵抗を継続できないことは誰の目にも明らかだった。

☆☆☆

「辞令だ」
　出頭したミハエルに、担当官は無造作にカードを差し出した。カストロプ動乱をよそに……ではなく、半分は巻き込まれているような状況だが、身分としては待命でロートリンゲン伯爵夫人の私的な護衛任務の一環として、マリーンドルフ伯爵邸の警護にあたっていたミハエルだった。
「まあ、大したものだな。いきなり当主代行の全権委任状を父親からもらっても、ちょっとは迷うだろうに」
　凄く綺麗で、頭の良さそうな人だったよ……ウジーがもたらしたヒルデガルト・フォン・マリーンドルフに関する情報はそれだけだったが、ミハエルはただ賢いというだけの女性ではないようだ、と思う。事前の説明もなにもなく、いきなり伯爵家当主代行の全権委任状である。並みの女性なら、いやたいていの男が父の真意を察しかねて行動には移れないだろう。だが、ヒルダはその日の内に典礼省へ赴き、委任状発効のための手続きを終えたのだ。
「万一、委任状のことがマクシミリアンたちに知れたら、ヒルダの

身が危ないかも知れない」
　マリア・アントニアの懸念がそれで、だから彼女はミハエルに私的警護を依頼したのだ。ロートリンゲン伯爵夫人ではなく、マリーンドルフ伯爵令嬢ヒルデガルトを対象として。
　ただし、マリア・アントニアの懸念は杞憂に終わり、動乱勃発から、マクシミリアンの伯爵領併呑宣言までは、ヒルダの身辺に怪しい影が動くことはなかった。
　むしろ、ヒルダが正式に当主代行となることが明らかになってからの方が危険だった。
　実際、マクシミリアンからの要求拒否と帝国への支援要請のためにヒルダが宰相府へ出向いた日だった。彼女の車を複数の車が尾行しているのをミハエルと、同じくマリア・アントニアが雇い入れた傭兵の一人が発見した。尾行の車は、間に車を入れ、わざと安全運転を繰り返すことで撒いたが、その後で、先行尾行……尾行する車の前に車を走らせるやり方だ……の別の二台を発見。こちらはやむを得ず、やや手荒なまねになったが、わざと事故を起こして交通を混乱させ、警察を介入させるころで尾行を断念させた。事故については色々と厄介なことになったが、マリーンドルフ伯爵家とロートリンゲン伯爵家の名を盾にして、強引に警察を黙らせることにした。
　その後も、マリーンドルフ伯爵邸の周囲には不審な人影や車が絶えず、ミハエルは正式にヒルダに申し入れをして、邸内の警備を強めてもらうことにしたほどだった。
　面会要請に、ヒルダは気軽に応じてくれた。
「あなたがタウンゼントシュタイン中尉？　ウジーからお話を聞いています」
　ウジーが言っていたように目の覚めるような美人だったが、話をしている内にミハエルは相手がそうした美女であることを忘れた。ウジーの言う通りにヒルダは理解が早く、ミハエルからの要請にも余計な遅疑や逡巡がなかった。
「分かりました。警備の人を増やします。宜しければ、お気づきになった不審な人物や車、それ以外になんでも、お話しいただけますか？」
　即決だった。カストロプ軍の侵攻への応戦指示。戦況の分析と対応。マリーンドルフ星系への支援の計画と実施。それらをヒルダがほとんど一人で切り回しているらしいことは家令に聞かされた。父マリーンドルフ伯爵の安危を案じて曇らせた眉の根に、匂やかな年頃の娘らしさが浮かぶのを除けば、その表情は抜き放たれた細身の剣（レイピア）を思わせて冴え冴えとした鋭利さを湛えている。
　すでに『伯爵夫人』と呼ばれるに相応しい、犀利さを伴った威厳をミハエルは感じずにはいられなかった。ロートリンゲン伯爵夫人と言い、このマリーンドルフ伯爵令嬢と言い。この伯爵様の家系には女傑が揃っているらしい。同時に素直に納得する。ロートリンゲン伯爵夫人が『こんなことでヒルダを躓かせたくない』と言っていた意味を。これだけのことを平然とこなしていく女性である。これから先、どんな人物になっていくことだろう。
　人事局からの呼び出しは、ヒルダとの面会を終えて戻ってきた時だった。
　ちょっと嫌な予感がした。ヒルダからの要請に沿う形で第三次のカストロプ動乱鎮圧部隊の編成が開始されている。この部隊はマ

リーンドルフ星系救援の任務を兼ねており、その分、シュムーデやその次にカストロプで失敗した指揮官よりも潤沢な兵力が準備されることになると言う。
しかし――楽勝（ミルク・ラン）であったはずの鎮圧任務が二度も失敗し、しかも失敗の理由が詳らかになっていない。にもかかわらず、勝って当たり前で、敗れれば生きて帝都に戻ることも許されない。とんだ貧乏くじだとして、鎮圧部隊の指揮官職を忌避する動きが極めて強い。
ミハエルを呼び出した人事局は主に副官任務を扱っている。彼自身のこれまでの経歴から言っても新たに司令官となった人物の副官任務あたりが妥当なところだが、現時点で新たに任命されそうな司令官任務と言えば、第三次カストロプ動乱鎮圧部隊が最も可能性が高い。
「は――辞令、受領いたしました」
カードの文面に目を落とす。『第三次カストロプ動乱鎮圧部隊司令官副官に任ず』の文字が目に飛び込んでくる。
「やっべー……」
「何か言ったか？」
「い、いいえ。第三次カストロプ動乱鎮圧部隊司令官副官任務、光栄の極みであります。喜んで拝受いたします」
「別に喜ばなくても不思議には思わんぞ。まあ、いい。拝受したのならさっさと認証の手続きをしろ――司令官の名前を聞いたら、着任を拒否したくなるかも知れないからな」
「え……それは、どなたですか」
「だからさっさと認証しろと言っている。一応、部隊の指揮系統は軍機※だということを卿が知らぬとは言わせんぞ」
つまり任務拒否をして命令違反に問われるか、任務を受け入れて、とんでもない無能司令官と組まされる不運を嘆く羽目に陥るか。不毛な二者択一を選べと言うわけだ。既に一度、上官の不興を買って待命の身分に落とされているミハエルである。任務拒否はそのまま『不名誉な除隊』への一本道になりかねない。
渡されたカードを端末に入れて承認のサインを入れる。同時に、紙の書類にもサインを入れて担当官に手渡した。どちらか一方で終われば簡単なんだが、といつも思うのだが。
「卿の新しい上官は、ジークフリード・キルヒアイス少将だ。名前は知っているか？」
「ジークフリード・キルヒアイス少将？　ひょっとして、ローエングラム元帥の部下の一人？」
「そうだ。あの金髪の孺子の幼なじみというだけで、ずっと側近として重用されているらしい。一度も実戦部隊を指揮したことはないくせに、あの金髪元帥の引きだけで少将閣下だそうだ。今回の司令官任命も、あの金髪元帥閣下から手が回っていたとしても驚かん。まあ、これも人生だと思って諦めることだな」
「そうですか、ジークフリード・キルヒアイス……少将ですか」
辺境へ去る時、ウルリッヒ・ケスラー大佐が『機会を掴め』と言い置いてくれた、二人のキー・パーソンの名前が、今目の前にある。これが機会だというなら、掴まざるべからずというべきではないか。担当官はローエングラム元帥にも、ひいてはその腹心たるキルヒア

※ 軍事機密。

イス提督にも剥き出しの反感を示しているが、単なる幸運や『引き』で二万の艦隊で四万の敵を一方的に叩きのめせるわけがない。
「ええ、そうします」
「……そうだ、卿は何歳だった？」
「今年、二三になりますが、それが何か？」
「キルヒアイス少将は二〇歳になったばかりだそうだ。卿より三つ下で、階級は六つも上というわけだ。精々、そのあたりに気をつけて任務に着くんだな」
ミハエルはこの担当官を嫌いになることにした。
早々に着任のための書類を受け取り、ローエングラム元帥府の所在を聞き出すと、心の中で思いっきり担当官に舌を出して見せてから退出する。

ローエングラム元帥府は活気に満ちていた。
「ミハエル・タウゼントシュタイン中尉。キルヒアイス少将閣下の副官を命ぜられ、出頭した」
案内を請うミハエルに、受付の少尉が笑顔を見せた。
「ああ、タウゼントシュタイン先輩。先輩もこの元帥府に招集されたんですか!?」
「あ……なんだ、リュッケか。そうか、もう任官していたんだな」
「ええ、まだ右も左も分からないんですが、いきなりローエングラム元帥府に入れって言われて。今は、ケンプ中将閣下付きですが、まだ特に決まった任務がないんで、こうして受付しています」
帝国軍には女の子がいませんからね……テオドール・フォン・リュッケ、士官学校首都校でミハエルの三年後輩だった青年は屈託なく笑う。優秀な生徒なのになぜか指導教官の受けが悪く、よくいじめられていたのをミハエルが庇ってやったこともある。
「先輩はキルヒアイス少将閣下付きですか、それは凄いですね」
「凄いのか？」
「ええ、凄いです。あのローエングラム元帥閣下が最も頼りにしておられるのがキルヒアイス少将閣下です。ええと、この元帥府、できてからまだ一月も経っていなくて、色々ややこしいですから、小官が案内します。多分、少将閣下は元帥閣下と用談中だったと思いますけれど、副官の着任ですから割り込んでも良いと思いますから」
「元帥閣下……というと、ローエングラム元帥閣下か？」
「ええ、ローエングラム元帥府ですから、他に元帥はおられません」
当たり前のことを当たり前にさらりと受け流し、リュッケは近くにいた少尉肩章に『ここを頼む。タウゼントシュタイン中尉を案内してくる』と声をかけた。
リュッケの言う通り、元帥府の中はまだ雑然としていた。多くの部屋がまだ工事中だったし、通路は行き交う士官達でごった返している。指示と確認の声が飛び交い、わんわんと反響するかのようだ。
「なるほど、凄いな、ここは……」
憲兵隊総監部や、さっき出てきたばかりの人事局が、まるで墓場のような沈滞と静寂に包み込まれているのとは対照的だ。無秩序で、統制が行き届いていないと見る者もあるだろうが、ミハエルにとってはこの元帥府の慌ただしさ、喧噪ぶりが好ましい。
やがてリュッケは一つのドアの前で立ち止まる。
「こちらです、中尉。小官は受付に戻ります。他にも着任の方が来

られると思いますので」
「ああ、ありがとう、リュッケ少尉。卿がいてくれるだけで心強い。後で色々聞かせてくれ」
「大丈夫ですよ、色々ならキルヒアイス閣下が聞かせてくださいます」
リュッケを見送り、ドアをノックする。
「ミハエル・タウゼントシュタイン中尉、キルヒアイス少将閣下の副官着任申告に出頭いたしました」
「……待っていました。入ってください」
柔らかな口調の応答は、些か予想を外れていたが、キルヒアイスがまだ二〇歳の若者であるという人事担当官の言葉を思い出した。
入室した時、ミハエルは一瞬目が眩んだような気がして思わず目をこすった。視界一杯に広がる豪奢な黄金の閃き、というのは錯覚に過ぎなかったのだろうが、数メートルの距離を隔てて立つ、黄金と白大理石の彫像が彼の視線を吸い寄せ、固定させてしまったのだ。
「卿がタウゼントシュタイン中尉か」
鍛え上げられた鋼の打ち鳴りにも似た、ビィンと腹の底に響くような、しかし見事なまでに音楽的な響きの声が耳を打った。ミハエルは踵を撃ち合わせて敬礼する。
「左様であります」
まるで黄金の光を纏っているかに見える髪に三方を囲まれた、透き通るように白い卵形の顔に完璧なバランスを保った鼻梁と唇とが配されている。髪と同じ黄金色に照明をはじく眉の下、蒼氷色（アイス・ブルー）の双眸が凍てついた焔を思わせて、ミハエルの背筋に戦慄を走らせた。かつて聞いたことのある、ラインハルト・フォン・ミューゼルという若者に関する噂が誇張されているどころか、この美しい若者のほんの一部をすら正確に伝えていないことをミハエルは察した。誰が、この若者を『生意気な金髪の孺子』だなどと呼んだのだろう。
「キルヒアイス」
黄金の光を閃かせ、生ける彫像のような若者が振り返った。応じて、背の高い、珍しいほどの鮮やかな紅の髪の青年が立ち上がる。
「はい、閣下」
「わたしは一度執務室に戻る。お前は、タウゼントシュタイン中尉に状況を説明してやれ。人事局がわたしの注文通りの人物を送ってきてくれたなら、一時間もあれば十分だろう。その後で、執務室へ来てくれ。最終打ち合わせをする」
「了解いたしました、閣下」
目に残像が残るほどの鮮やかな身のこなしで、ラインハルトが身を翻す。ミハエルは直立不動のまま、敬礼で見送るしかなかった。
「驚きましたか、タウゼントシュタイン中尉」
赤毛の青年……彼がジークフリード・キルヒアイス少将であることは自己紹介されるまでもなかった。そのキルヒアイスが声をかけてくる。相変わらずもの柔らかな、二人の間の階級差を感じさせない口調だった。
「あ、いえ。いや、確かに驚きました。あんな方が本当にいるのですね」
「ええ……余り時間がありません。すぐにでも状況説明を始めたいのですが、宜しいですか？」
「失礼いたしました、閣下。小官は一介の中尉に過ぎません。そんなにお気を使っていただく必要はありません」

「これが私の地ですから、今更変えようもありませんよ、中尉。早速ですが、カストロプの件です」
　ローエングラム元帥府には帝国軍の粋と、ラインハルトとキルヒアイスが信じる人材が招集されているが、今回の動員には元帥府の主要幕僚たる中将クラスは参加しない。指揮官のキルヒアイスが少将であるため、人事上のバランスを取らねばならないことと、何よりもラインハルトがそれを望んでいるためだ。キルヒアイスの麾下に集められたのは准将クラスの指揮官数名と、合計で三〇〇〇隻の高速艦艇、付随する補給艦数百隻のみである。
「三〇〇〇ですか!?」
　カストロプ侯爵軍は当初一二〇〇隻、その後、六〇〇隻を超える艦艇をマリーンドルフ星系へ投入してきている。総兵力としては二〇〇〇隻近い艦艇を動員可能と見るのが至当と言えた。
「シュムーデ提督と、それに続いた第二次鎮圧部隊はそれぞれ二五〇〇と二〇〇〇の兵力を率いていました。それらが五日と持たずに惨敗しているのです。三〇〇〇なら、おそらく兵力的には上回れますが、シュムーデ提督らが同等の兵力で敗れたことに対するリスクは見なければなりません」
「そうですね。でも、のんびりとはしていられないのです、中尉。マリーンドルフ星系の守備隊はもう何日も持たないでしょう。マリーンドルフ星系の主星がカストロプ軍の手に落ちてしまうようなことは絶対に避けなければなりません」
「主星さえ手に入れてしまえば、もうマリーンドルフ伯爵自身には利用価値はないとカストロプ侯爵側が判断すると仰るのですか？」
　さすがですね……青い目が柔らかく微笑むのに、ミハエルは僅かな不信を込めて、赤毛の上官の顔を盗み見る。二〇歳で少将の高位に駆け上がった若者である。自ら恃むところ高く、他者を認めるに潔しとしないのが普通ではないか。まして、ミハエルは士官学校を卒業してわずか二年、漸く中尉に昇進したばかりの駆け出し士官である。ひょっとして、三歳年上の副官と言うことで使いにくさを感じているのだろうか。
　だが、キルヒアイスの口調からは、その感じの良い表情以外のいかなる底意も感じられなかった。ミハエルとてまだ二三歳。他者の言葉の裏をすべて読み取れると自負できるような年齢でもないし、あと三〇年の年輪を重ねてもそうした自負を自らに持てるとは思えないが。
「その通りです。すでに伯爵の当主代行は伯爵令嬢の務めるところとなっています。実質的に伯爵の利用価値は既にない。ただ、マリーンドルフ主星を陥落させてから少しの間は伯爵には生きていてもらわねばならない。伯爵家と星系の様々な資産や設備を利用するには、どうしても伯爵の命令が必要になりますから」
「カストロプ星系に加えて、マリーンドルフ星系の資材や生産設備を押さえられると少々厄介なことになりますね」
「そうです――」
　ゆえに順序としてはマリーンドルフ星系の救援、それからカストロプ侯爵軍の撃破とカストロプ星系の制圧ということになる。
「時間がかかりますね。マリーンドルフ星系の救援に手間を取られている間に、カストロプの防備を固められるとかなり手こずりますね」
　キルヒアイスは微笑い、言い切った。

「私は、できれば半月で片を付けたいと思っています」
「半月……ですか!?」
　ミハエルは唖然として、この鮮やかに赤い髪をした長身の青年を見詰める。どう見ても、歴戦の勇将とは見えない。大人しやかな、感じの良い青い目と姿勢の良い長身だけを見ていると、どこかの学校の若い教師のような印象が精一杯のところだ。僅かに、その隙のない身のこなしと、名匠の鍛えたサーベルを思わせる鋼のような体躯が、ジークフリード・キルヒアイスがくぐってきたに違いない多くの戦場を想起させるものだった。
「これは、私とローエングラム元帥とで立案した基本計画です。簡単に説明しますから、意見を出してください」
「あ、あの、小官は副官でして、参謀ではないのですが」
　副官は上官の業務を補佐し、時に一部を代行するが、自ら作戦を立てたり、修正意見を述べる権限はないはずではないか。
　キルヒアイスは再び静かに微笑んだ。
「私は卿に使い走りを期待しているわけではないのです、タウゼントシュタイン中尉。私は今次の鎮圧軍の指揮官です。卿には、私の様々な命令や連絡を中継してもらわなければなりませんし、卿が単なる伝令係に終始するようなことは望みません。作戦を十分に理解した上で、任務にあたってもらいたい。これが私の希望です。宜しいですね」
　説明を始めても宜しいか……相変わらずもの柔らかな口調でキルヒアイスは確認し、ミハエルは気圧されて、それ以上の言葉を飲み込んで頷く。キルヒアイスがキーを弾くと、マリーンドルフ星系とカストロプ星系を含んだ星々を含んだ帝国の一角が、淡い銀色の光の柱の中に音もなく瞬き始めた。

　キルヒアイスが鎮圧部隊の編成を完了したのは、ミハエルが副官として着任してわずか二日後のことだった。この間、確かにキルヒアイスは彼を『使い走りには使わなかった』のだが、ミハエルにしてみれば逆の意味で悲鳴を上げさせられたのも事実だった。
「これじゃ、夜中にワインを買いに行かされる方がずっと楽だ」
　ウジーに送ったメールでぼやいて見せたものの無論本音ではなかった。同じ多忙でも、ブルーメンタール中将とキルヒアイス少将では、全く多忙さの意味が違っていた。副官と召使いの差異を理解していなかったブルーメンタールに対して、キルヒアイスが彼を私的な所用に使うことは滅多になかった。代わりに赤毛の上官がミハエルに期待したのは、あくまで本来の副官としての任務の遂行であり、さらに上級士官としての識見の習得だった。作戦会議の中でもキルヒアイスは平然とミハエルの発言を求め、ミハエルを驚かせたことに、彼の発言を採用したことも一、二の例に留まらなかったのである。さらに、副官である以上、当然のことだが、ローエングラム元帥府の枢機に関わる会議であろうとも、キルヒアイスはミハエルを伴うことを躊躇わなかった。
「小官がこのような会議に同席するのはいかがなものか、と」
　何度となく同席への謝絶を示して見せたが、キルヒアイスは取り合わなかった。
「卿は私の副官です。である以上、私が出席するいかなる会議にも出席してもらいますし、出席した以上は副官としての任務を果たし

てもらいますよ。それだけのことができる人を副官として任命してくれるように軍務省にはお願いをしたつもりです」
　にこやかな言葉が、かえってミハエルを恐れさせ、逆の意味で鼓舞したと言って良い。キルヒアイスの言葉は、ミハエルがそれだけの力量を証明できなかったらいつでも副官任務を解任すると言っているに等しかった。とんだ買いかぶりといえないこともなかったが、ミハエルとて一応の野心を抱いて士官学校の門をくぐり、上を目指してきた人間である。キルヒアイス少将副官に着任以来、ミハエルがろくに眠る暇も取れなくなったのは、ある意味で当然のことだった。
　キルヒアイスとの確執が噂されていたハンス・エドゥアルト・ベルゲングリューン大佐が元帥府に出頭し、鎮圧部隊の陣容が最終的に固まったのが、ミハエルが副官任務について二日後のことだった。すぐにでも出撃……を期待したミハエルは、しかし、キルヒアイスの穏やかな沈黙に接することになった。彼の期待を完全に裏切ったことに、キルヒアイスはさらに一〇日間、艦隊を帝都に留まらせたのである。
「怖じたか……」
「やはり衛星は衛星でしかないわ……」
　密やかな嘲りの囁きがミハエルの耳にも何度となく届いたものだった。彼にしてみれば、初めての実戦場への出撃をおあずけにされる苛立ちは感じないでもなかったが、その間、既に述べたように本来の帝国軍士官としての訓練の場を与えられたことになったわけで、キルヒアイスの判断がありたくないわけではなかった。
「何を待っておられるのですか……？」
　問うてみようとして、ミハエルは思い止まっている。キルヒアイスが彼に期待するとすれば、理由を問うことではなく、彼なりに理由を推測し、キルヒアイスからの指示に応えることであることが自明だったからだ。
「キルヒアイス少将は何かを待っておられるのではないかと思います。何、とは分かりませんけれど」
　リュッケの言葉はミハエルにとって新鮮な驚きだった。新任の少尉に過ぎないリュッケですら、元帥府の意思を測り、自らの判断に資しようとしているのである。キルヒアイスのもとで豊富な情報を与えられているミハエルが、指示のみをうけて動くマリオネットであって良いはずはなかった。
『我が軍、損耗率既に三〇パーセントを超え、これ以上の交戦困難と認む。至急の救援を求む。至急の救援を……』
　マリーンドルフ星系軍からの、救援要請は半ば悲鳴を帯び始めたのが、まさに一〇日後のことだった。
『カストロプ星系軍はさらに兵力を増強したものの模様。その兵力は延べで二五〇〇隻に達するものと推測される』
　軍務省経由でその通報が入ったのは深夜だったが、ミハエルはキルヒアイスへの連絡をためらわなかった。これが、キルヒアイスの期待していた情報であることを確信していたし、キルヒアイスの反応もそれを裏切らなかった。
『分かりました。五分後、航行艦橋に向かいます。艦橋要員全員を招集してください。直ちに出撃します』
　キルヒアイス少将を首将とするカストロプ動乱鎮圧部隊・兼・マリーンドルフ星系救援部隊が帝都（オーディン）を離れたのは、その夜のことだっ

た。宇宙港（テンペルホーフ）の上空を響動（どよ）もして一斉に発進する艦艇群のエンジン音が、時ならぬ轟音で帝都を揺るがし、事情を知らない平民たちが着いたばかりの眠りの中から蹴り出されて、上空を見上げるその視界の中で、約三〇〇〇隻の艦艇が光の尾を引いて一斉に上空に舞い上がっていくのを見送ることになった。

ラインハルトは元帥府最上階のベランダに立って、彼の一〇年来の腹心の旅立ちを見送り、野心に満ちた蒼氷色の眼光で帝都の夜空を切り裂いていた。

「勝ってこい、キルヒアイス。見事にな――」

同じ時間帯、マリーンドルフ伯爵邸では、伯爵令嬢ヒルダもまた、時ならぬ艦隊出撃の喧噪に驚く家令のハンスに鋭気に満ちた微笑で答えている。動乱がマリーンドルフ星系に及んで約一ヶ月。その間、不眠不休に近かった彼女だが、この時の表情には疲労や傷心から来る一片の翳りもなかった。

「これでやっとこの騒ぎも終わります。お父様も無事に戻ってこられるに違いないわ」

ようございました……半ば涙しながらも笑顔を取り戻した忠実な家令をよそに、この時のヒルダの微笑は二重の意味を持っていた……とは、彼女を歴史上の存在として描こうとする人々が等しく筆を揃えるところである。ヒルダ……ヒルデガルト・フォン・マリーンドルフはこの時、カストロプ動乱の確実な鎮圧実現と父フランツの生還と同時に、ラインハルト・フォン・ローエングラムとのコンタクトの機会を得たことを確信していたに違いない――と。

ラインハルトが、腹心ジークフリード・キルヒアイスに対して動乱鎮圧指揮官の任が下るよう、リヒテンラーデ侯に依頼し、侯が難色を示すとその政務補佐官ワイツを経由して工作を施したのは事実である。一方で、そもそもラインハルトがカストロプ動乱鎮圧に関心を持った理由については詳らかでないのだが、そこにヒルダの意思が働いていたとしても何の不思議もなかった。彼女は早い時期からラインハルトの台頭に関心を持ち、友人達にも注目すべき人物として語っていたことは事実なのだから。

いずれにしても、この日キルヒアイスは初めての独立任務部隊指揮官として帝都を出撃した。副官として彼に従うミハエル・タウゼントシュタイン中尉にとっても、初めての実戦場への出撃だった。

☆☆☆

帝都を出撃して五日目、キルヒアイス艦隊は予定通りマリーンドルフ星系に入った。

「全艦タッチダウン確認。タッチダウン・ポイント、第五惑星平均公転軌道より一八〇〇・五光秒。予定通りです。各分隊よりの報告を確認、落伍艦、損傷艦の報告ありません。ご指示がなければ、このまま第二戦闘配備、星系内第一航行速度にて、星系主星へ向かいます」

ミハエルの報告に、キルヒアイスは頷いた。

「新たな指示はありません。予定通りに進めてください、中尉」

「しかし……宜しいのですか、提督。カストロプ軍が、こちらの想定通りに動きましょうか？」

鋭角的な顔つきに厳ついあごひげ、突き刺すように鋭い緑の目の

軍人がキルヒアイスを振り仰いで、思案を問うた。その目に相手の力量を伺うような色合いが濃い。
「動かない、かも知れませんね」
深い湖水にも見て、キルヒアイスの青い目は僅かのさざ波をも浮かべてはいなかった。
「想定通りにすべてが動くなら、人間が乗っている必要はないでしょう。すべてを機械とコンピュータに任せておけばいいのですからね。ただ、相手が動いてくれるのに対応していたのでは、こちらの動きが遅れます。こちらの動きに合わせてくれた方が、やりやすいと思いませんか？」
「主導権……ですか」
軍人……参謀長のハンス・エドゥアルト・ベルゲングリューン大佐は唸るような声で応じた。二〇歳の赤毛の若者の麾下とされたことに反発した彼が、当初は着任を拒否していたという噂はミハエルの耳にも入っていた。典型的な男性社会の帝国軍だが、噂の多さ・速さは女性のコミュニティにも決してひけを取らない。何しろ、噂の真偽をかぎ分けられるか否かで戦場での生死を分けることも一再ではないというのが軍隊というものであり、自然、噂には敏感になり、かつ悪い噂ほど早く広く広がる。その後、参謀長として着任したものの、ベルゲングリューンはキルヒアイスが上官たるに相応しくなければ、その場で辞表を叩きつけるつもりなのだ……噂にはそんな囁きまで含まれている。
「主導権、というのが敵よりも先に動いて、相手を対応させるという意味なら、その通りですね……中尉、艦隊が所定の宙点まで進出したら、マリーンドルフ軍に連絡を。内容は、ＭＫ-一〇〇一です」
「……いちいち疑問を呈して申し訳ありませんが、閣下。これも相手のあることですぞ」
キルヒアイスの指示は、マリーンドルフ星系軍に交戦を切り上げ、主星の最終防衛ラインに下がるよう命じるものだった。彼の艦隊が星系内にタッチダウンした時点で、マリーンドルフ星系軍の指揮権もキルヒアイスに委譲されているから、指揮系統上の問題はない。
ベルゲングリューンが危惧している点はミハエルにも理解できた。マリーンドルフ星系軍はカストロプ軍と交戦中、それも衛星や小惑星群を盾にして辛うじて主星への侵攻を食い止めている、いわばつま先立って敵の攻撃に耐えている状態である。
「すでに彼らは最終防衛ラインにほとんど下がっている状態といえましょう。この時点で、交戦を切り上げようとすれば、下がり際を追撃されて壊滅的打撃を被りかねません」
「その危険性はあります」
すでにその件は事前に検討済みではないか。キルヒアイスは苛立ってもよいのではないか……ミハエルの視野の中で、しかし、キルヒアイスは静かに微笑んだだけだった。
「だから我々は前進しなければなりませんし、タイミングも重要です。よろしくお願いします、参謀長」
軽く頭を下げられ、ベルゲングリューンはちょっと狼狽えたように慌てて敬礼する。確かに彼はキルヒアイスの力量を測っているようだったが、逆に度量を問われたのは彼ベルゲングリューンの方のようだ。少なくともミハエルにはそう見えた。
「シュヴァーベンＩ（アイン）より、全艦へ。第二戦闘配備を取り、星系主星へ向かう。速度は星系内第一航行速度。航路は所定の指示からの変

更なしとする」
　後衛集団も大きく艦列を広げ、航法と側方からの敵襲に備える。一方、前衛集団からは先遣偵察艇と無数の探索プローブが放出されて、艦隊の前方空間に展開していく。偵察艇とプローブは大きく二群に別れ、一群は艦隊を頂点とした鋭角的な角度をもった漏斗状となって数千光秒の前方宙域までをその索敵圏に取り込んでいく。もう一群は、同じく艦隊を底にした浅く広い皿状に広がり、艦隊から数百光秒の範囲に警戒網を広げていった。
「敵はマリーンドルフ星系軍との交戦状態にある以上、前方への中遠距離索敵だけで十分ではないのか」
　作戦立案時にはそんな声も聞かれたが、キルヒアイスは却下した。
「宇宙には戦線も戦面もありません。指揮官にその意思があり、補給が保証されるのであれば、いかなる宙点にも十分な兵力を持って侵攻することが可能です。敵が前方にのみ存在すると仮定するのは我々の都合、相手にも都合があると言うことを忘れるのは愚かでしょう」
　キルヒアイスの指示した宙点に艦隊が達したのは約二時間後。その旨をキルヒアイスに報告したミハエルは、予定通りにマリーンドルフ星系軍への通信を発信する。
『発、カストロプ動乱鎮圧任務部隊司令官。宛、マリーンドルフ星系軍指揮官。我、マリーンドルフ星系に到達す。星系軍は積極的交戦を切り上げ、最終防衛ラインにて戦力の温存に務めるべし』
　同時にキルヒアイスの旗艦『テューリンゲン』を中心とする中央集団もまた探察プローブを発出。数百光秒から一〇〇〇光秒の中近距離宙域に第三の探索網を展開し始めた。
　戦闘情報表示スクリーンの中をゆっくりと動いていくプローブ群の動きを追いながら、ミハエルは知らず知らずに早くなっていた呼吸に気付く。鎮めようと大きく息をついたのに、キルヒアイスが気付いたらしかった。
「緊張していますか、中尉？」
「え……あ、はい、閣下。あ、いいえ、そんなことはありません」
「無理をすることはありません。私も初めての戦場に出た時は緊張しました。今でも、戦場を前にしたら緊張しないではいられません」
「閣下が……ですか？」
　ジークフリード・キルヒアイスは一五歳で幼年学校を卒業。直ちに准尉に任官し、同じく少尉として任官したラインハルト・フォン・ミューゼルとともに惑星カプチュランカ……文字通りの最前線！……へ赴いている。以来、数十の戦場を駆け抜け、五年余りで八つの階級を駆け上がってきたのが、この赤毛の提督であることをミハエルは知っていた。
「閣下が緊張なさるなどと……」
「緊張もしないで、日常のような態度で戦場にはいるようにだけはなりたくありませんよ、中尉。戦場に入ることは、人を殺しに行くということなんです。生きて還ったとして、それは人を殺してきたということなんです。分かりますか、中尉」
「は――」
　有り体に言えば考えたこともなかったと言っていい。宇宙艦隊で最小の艦艇である宙雷艇ですら、搭乗員は一〇数名を数える。宙雷艇一隻を沈めれば、自動的に死者一〇数名。搭乗員六〇〇名を超える戦艦を撃破すれば……

「そんな風に考えたこともありませんでした」
「いつも考えている必要はないです。そんな考え方もあると覚えていてくれれば十分です」
時計（クロノメータ）に目をやり、キルヒアイスは小さく頷いた。
「まだ少し時間がありますね。私は一度、私室に戻ります。中尉はタンクベッド入りしておいてください。時間は二時間、良いですね？」
「は、しかし……」
副官は常に上官の行動を把握し、緊急の連絡に応じられる状態になければならない。戦場を前にして、自分一人タンクベッド入りするなど考えられないではないか……抗弁は、しかし、柔らかな、しかし断固とした言葉に封じられた。
「命令です」
反論のしようもなかった。
タンクベッドに入り、身体の周囲に濃厚で暖かな塩水の感触を感じながら、ミハエルはキルヒアイスの言葉を反芻し、そして、ふとウジーのことを思い出した。昨年末の怪我もすっかり癒えた彼女は、職人修行も最終段階を迎えたらしく、本人に言わせれば『四分の三人前』の職人として忙しく働いているらしい。何日かに一度は、『ちょっと失敗作』と称して、元帥府に様々な菓子が届けられ、いつの間にか、ミハエルの控え室はそれを目当てに集まってくる若い士官や下士官のたまり場のようになっていた。
戦場に出ると言うことは人を殺すことだ――実感はなかったが、軍人であると言うことと人を殺さねばならないことは同義であるとは、士官学校入学と同時にたたき込まれた概念でもあった。ただ、キルヒアイスに言われるまで実感を伴って迫ってくることはついぞなかったのだ。
直接にしても間接にしても戦場に出れば、自分は殺人者になる。殺人者になった自分は変わるのだろうか。そうした自分をウジーはどう思うだろう……そう思ってしまわずにいられない。とは言え、ウジーには『中尉さん』としか呼んでもらえていないし、それ以外の呼ばれ方を強いては望んではいない……と思っているミハエルではあったのだが。

「プローブに反応、距離約五八〇光秒、水平方位三三、垂直方位プラス七八。速度は星系内第一航行速度。接敵までの時間は約六時間。兵力推定一五〇〇」
二時間半後、ミハエルが戻って間もなく、緊急報が艦橋の空気を揺るがした。ベルゲングリューンが、艦橋正面を覆った半球形スクリーンを見上げる。垂直方位七八。宇宙において本質的に上下の関係はないが、相対的に見れば探知された目標は艦隊の航行方向に対して垂直に近い角度で接近してきていることになる。
「中尉、マリーンドルフ星系軍から連絡は？」
「……まだ、入っていません」
「閣下」
ベルゲングリューンがキルヒアイスを見た。
「敵は移動したと考えます。我々の狙い通りに動いてくれているようです」
だが、キルヒアイスはすぐには頷かなかった。

「敵の兵力が少なすぎますね。一五〇〇では中途半端ですし、位置も不自然です」
　確かにカストロプ侯爵軍艦隊兵力的に劣勢である。何の障碍物もない宇宙空間で正面からぶつかれば、単純に兵力が多い方が勝つのだから、警戒の手薄な側面や後背に回り込み、奇襲を狙う。当然の戦術だが、キルヒアイスにとってはカストロプ侯爵軍の位置は中途半端、と言うより、いかにも発見してくれと言わんばかりのポイントだと言うのだ。
「針路、および速度はこのままとします。戦闘配備も変更なし」
「閣下！」
「罠にかけたつもりでかけられる……ということもあります、大佐。獲物に罠を破られれば、死に至るのは猟師。違いますか？」
ベルゲングリューンが沈黙に陥るのを待って、ミハエルはキルヒアイスの命令を伝達する。針路・速度を維持し、旗艦よりの指示を待て。戦闘配備、変更なし。数隻の分艦隊旗艦からは『ただちに第一級戦闘配備への移行、要有りと認む』との意見具申が上がったが、キルヒアイスはすべて却下した。
　さらに一時間余り――
「敵らしきもの見ゆ。距離三四四光秒、水平方位三四八、垂直方位マイナス四四。星系内最大戦速にて急速に接近中。接敵まであと約二時間。兵力推計約一〇〇〇」
　ベルゲングリューンが唸る。どうしてこんなに近くまで接近を許したのだ……との言葉はなかった。キルヒアイス艦隊の展開した中遠距離探索網と中近距離探索網、その丁度隙間を縫うようにしてこの第二の目標……おそらくはカストロプ侯爵軍の主力は接近していたのだ。
「第一の目標は囮というわけですな。勿論、我々の探索網を逆探知して、隙間を探る目的もあったんでしょうが」
「そうですね」
　依然として穏やかな口調を崩さないキルヒアイスにミハエルはやはり舌を巻くしなかった。スクリーンの中で『識別不能』の表示を浮かべた光点が、緩やかに脈動しながら一瞬ごとにその光を強めてくる。あと二時間の内に彼我双方が戦場に際会し、戦端が開かれるのだ。
　咽喉の奥が干上がり、舌が強ばってくるような感触が不愉快だったが、動悸が速くなりこめかみに心臓の脈動を感じるのを止めることができない。
　指揮シートからキルヒアイスが立ち上がったのはその時だった。長身を折り曲げるようにコンソールに両手をつくと、普段の大人しやかな声とは別人のような、鋼鉄の鞭を拍つような命令がその口から迸る。
「全艦反転一八〇度。針路、マリーンドルフ星系跳躍点。速度、星系内第一航行速度を維持。有人索敵部隊はそのままマリーンドルフ星系軍に合流、艦隊に戻る必要はありません」
　最大戦速ではないのか……再び、今度は数百の艦艇からの反問が跳ね返ってきたが、ミハエルは『司令官のご命令です』としてすべてをシャットアウトした。キルヒアイスが視線を向けてくるのに、『速度に関して、星系内第一航行速度の維持を周知させました』と応じる。キルヒアイスは微笑い、頷いてくれた。
　その時点で最初に探知した一五〇〇隻の敵艦隊も速度を上げ、最

大戦速で接近を開始している。合流すれば敵兵力は二五〇〇隻に達し、キルヒアイス艦隊の総兵力に匹敵する。しかも反転し、星系外へ撤収する隊形のキルヒアイス艦隊を複数の方向から尾撃する態勢である。帝国の、そしてこれは自由惑星同盟も同様だが、宇宙戦闘艦の攻撃力は主に艦首方向を指向しており、後背からの攻撃には弱い。交戦状態に陥ったら、五〇〇隻程度の兵力差は問題にならないかも知れない。

だが、それがキルヒアイスの狙いであることを、ベルゲングリューンは無論のことミハエルも知っていた。増援部隊が急速に迫ってくる中、カストロプ侯爵軍は対応を迷っていたに違いないのだ。マリーンドルフ星系軍との戦いを続け、短時間にこれを打ち破って星系主星に立てこもるか、さもなければ全軍を挙げて反転し、正面から増援部隊との会戦を挑むか。

「敵があくまでマリーンドルフ星系軍との戦いに拘ったら、どうなっていたでしょうか？」

ミハエルの質問にキルヒアイスは簡単に答えてくれたものである。

「必ず、彼らは星系軍との戦いを止めて反転してきます。二〇〇〇を超える艦艇を、幾らカストロプ侯爵といえども簡単には集められなかったはずですからね」

その時は半信半疑だったが、事実としてカストロプ侯爵軍は全軍を挙げてマリーンドルフ星系主星の攻略を断念して、キルヒアイス艦隊を追尾してきている。これで、マリーンドルフ星系主星がカストロプ侯爵軍の手に陥る危険は一旦は回避されたことになるだろう。

そうは言え、最大戦速で追ってくる敵艦隊に後背を曝し、じりじりと彼我の距離を詰められていくのは、追われる側にとっては神経を炙られるような苦痛には違いなかった。

「跳躍点まであと二時間、敵艦隊までの距離一四〇光秒、水平方位一八〇、垂直方位ゼロです！」

電子戦士官の声が切迫する。

「敵は速度を上げています。星系内限界速度を一〇パーセント余りオーバーしています」

「ワープ準備を開始してください。跳躍点に入った艦から順次、司令部からの指示を待つことなく目標宙域に向けてワープ開始を許可します。速度、五パーセント上げを指示してください」

キルヒアイス艦隊が速度を上げる。スクリーン上に浮かび上がる計算結果をみつめるミハエルの額にも汗が浮かんだ。宇宙艦隊の交戦距離は一〇光秒以内。跳躍点に入る前にあと一三〇光秒を詰められれば、後方から撃たれる。キルヒアイスの命令は、ワープ可能宙域に入った艦から順次にワープに入れというものであり、艦隊は比較的細長く延びている。後背から、たとえば熱反応観測による弾着観測で撃たれれば被害は軽視できないものになるだろう。そして、キルヒアイスは旗艦を中央集団から後衛集団に移している。正確には後衛集団と中央集団を入れ替え、主力の中央集団約一〇〇〇隻をそのまま艦隊の最後尾に付けているのだ。交戦距離に入ってしまえば、真っ先に狙われるのは間違いない。

「跳躍点まであと一時間、距離七八光秒！」

カストロプ侯爵軍はさらに速度を上げたようだ。跳躍点は、星系内の天体が及ぼす重力の均衡点ともいうべき宙域で、確かにその近傍では安全係数を無視した航行速度も可能である。カストロプ侯爵軍の速度はその限界ぎりぎりをさえ踏み越える寸前のもので、彼我

の距離は想定を超えて急速につまりつつある。
　スクリーンの映し出した相対速度の数字が、ミハエルを青ざめさせた。
「閣下、このままでは跳躍点に入る前に追いつかれる可能性があります！ 旗艦を含む後衛集団が跳躍点に入った時点で、相対距離は一〇光秒を切り、弾着観測射撃が可能になります」
「なかなかやりますね、敵も」
　キルヒアイスからの応答に動揺はなかった。
「我が艦隊も既に最大戦速に近い速度を出しております。これ以上の増速を行った場合、跳躍点の手前で一旦減速しないとワープの精度に狂いが出る恐れがありますが？」
「前衛と中央の両集団はこの速度で敵の射程に入る恐れはないのですね？」
「それは――大丈夫です」
「では、中央と前衛集団は跳躍点に入る一〇分手前まで最大戦速に増速。我が集団は、現速度を維持。敵との相対距離が射程ぎりぎりになる直前に増速。そのまま跳躍点に入ります。そのタイミングを算定し、指示を与えてください。ワープ精度については余り気にすることはありません。可能な範囲で、かつ事故を起こさない精度での算定を行い、十分な安全係数をもって跳躍に入るよう指示してください」
「り……了解であります」
　敵は……おそらくマクシミリアン・フォン・カストロプ自身が総指揮をとっているのだろう……キルヒアイスの意図の一半を読んでいる。それもまたキルヒアイスの読みの内にあった。シュムーデ提督と、彼に続いた第二次鎮圧部隊の敗北から導き出されてくる結論、シュムーデらが敵を舐めきっていたこと。かつ、敵の総指揮官が一定以上の戦術能力の所有者であるに違いないこと。であれば、仕掛けるにしても勝利の機会を見せない限り、相手は罠に踏み込んでは来ない。
　ベルゲングリューンとミハエルは同時に敬礼し、司令官の指示を首肯した。

　さらに約一時間後。
「前衛集団、中央集団、ワープ開始。敵との相対距離一二光秒、交戦距離まであと一分半です」
　ミハエルの報告に電子戦士官の悲鳴にも似た叫びが重なった。
「後方より高温反応多数！」
「な――」
「敵、射撃、来ます。五……四……三……二……一……今っ！」
　旗艦艦橋の照明が一瞬ブラックアウトし、すぐに瞬いて非常灯に切り替わり、さらに通常照明へ戻った。直撃こそなかったが、複数の射線が旗艦の防禦シールドに虹色の閃光を走らせ、慣性中和機構の限界を超えた衝撃を艦に与えたのだ。
　同時にキルヒアイス艦隊後方が無数の火球の連なりに覆い隠され、閃紫色から一瞬に正視しがたい純白の光芒に彩りを変じていく焔の渦に巻き込まれていく。
「敵第一射、着弾しました！」
「こちらシュヴァーベンI（アイン）、各艦、被害報せ！」

再び声が交錯する。
「高温反応多数……第二射来ます――今っ！」
衝撃が走り抜け、ミハエルはシートの肘掛けに両手を食い込ませて耐える。艦隊後方が白光と火球の連なりに覆い尽くされているのを辛うじて確認すると、艦隊内通話装置（TBS）に向かって叫んだ。キルヒアイスの許可は必要ない。
「全艦、最大戦速――このまま跳躍点へ飛び込み、順次ワープに入れ！」
キルヒアイス艦隊の後方集団が弾かれたような加速を開始し、次々に高次空間へと駆け込んで姿を消していく。その間もカストロプ侯爵軍艦隊の射線が後方集団に襲いかかるが、そのほとんどは狙いを外し、なお脈打ちながら巨大な光の壁を広げている宙域に集中している。
「……被害集計完了しました」
戦闘情報表示スクリーンの表示を、ミハエルはしばらく信じられなかった。少なくとも第一斉射と第二斉射では相当数の艦が直撃されたのではないかと思っていたのだが。
「被害、ありません。損傷艦、ゼロです、閣下」
「機雷を射出しておいて正解でしたな」
最大射程射撃なら熱源探知での弾着観測射撃しかできない……であれば、高熱源ダミーと機雷とをまぜて艦隊後方に射出しておけば、万一最大射程で撃たれても、そちらに射線をすべて吸収できるのではないか。ベルゲングリューンの提案にキルヒアイスは直ちに許可を与えたのだ。一旦敵の射撃が着弾し、機雷が連鎖爆発を生じれば熱源観測などもう役には立たないのだ。
「跳躍点に進入しました。ワープ開始します！」
勝ちどきにも似て艦長の声が艦橋に轟き、後方集団の最後尾を守ってキルヒアイス艦隊旗艦が高次空間へ姿を消していく。

諦め悪く、なお数十回にわたって、すでに何も存在しない空間を主砲斉射で空しく貫いてから、ようやくカストロプ侯爵軍艦隊もキルヒアイス艦隊がこの宙域を立ち去ってしまったことを認めた。トレースされたキルヒアイス艦隊の行方が確認されると、動揺を隠しきれない交信が慌ただしく飛び交う。すでに内容を暗号化する余裕すら失われており、それらが跳躍点に残されたスパイ衛星に残らず傍受されていることにも気付いていなかった。航路のトレース結果は、キルヒアイス艦隊がカストロプ星系へ向かっていることを示していたのである。再び忙しく交信が行われ、艦隊は急速に減速しつつ跳躍点に入っていく。反転したキルヒアイス艦隊が、そのままカストロプ星系を直撃する意図であることに間違いはなかった。そして、意外なまでに頑強に抵抗するマリーンドルフ星系軍の排除のために、マクシミリアン・フォン・カストロプ侯爵軍艦隊のほぼ全兵力をマリーンドルフ星系へ注ぎ込んでしまっていたのだ。
無論、鎮圧部隊の編成を完了して約二週間、キルヒアイスがマリーンドルフ星系への出撃を見合わせていた理由がまさにそれであることなど、マクシミリアンの視野の外にある。彼が焦れて侯爵軍の予備兵力までを動員するのを待っていた、などとは。
「追え、追って、小癪な空き巣狙いどもを追い払うのだ！」
狼狽した首将の叫びの元、カストロプ侯爵軍艦隊もワープに入っ

た。キルヒアイス艦隊に大きく遅れること約三時間である。

☆☆☆

「帝国軍艦隊を確認。距離約三六〇光秒。最大戦速にて主星へ向かっております」

星系内にタッチダウンして最初にもたらされた報告に、マクシミリアン・フォン・カストロプは表情から焦燥の色を拭い落としてほくそ笑んだ。帝国軍は彼ががら空きにしているカストロプ星系にまんまと侵入を果たした。確かに、もう星系内に、二〇〇〇隻以上の帝国軍艦隊に正面からの戦いを挑める予備の機動戦力はのこっていないのも事実だ。

「いいぞ、このまま帝国軍を主星の防衛圏内に追い込め。我が艦隊も最大戦速だ。距離を保ち、帝国軍を追うぞ」

「あの、マクシミリアン様」

横合いから言葉を挟まれ、マクシミリアンの眉が神経質に震える。多くの大貴族の子弟の例に漏れず、彼もまた異論を差し挟まれるのを好まない。議論を議論として他者の意見を聞く冷静さを保つだけの余裕がなく、反論がそのまま自身への侮辱としてしか聞こえない狭量さが彼らに共通した資質だった。

怒声と共に、口を挟んだ部下をブリッジからたたき出す衝動に、この時のマクシミリアンは辛うじて耐えた。その部下が今回の動乱において良く彼を補佐し、二度にわたる鎮圧部隊撃退に少なからぬ功績を上げていたことを思い出したためだが、それだけで、元々乏しすぎる自制心の底を浚うほどの努力が必要だった。

「いかがでありましょうか。もうこれ以上の抗戦は……」

「なに?」

マクシミリアンの眉が更に危険な角度につり上がる。部下は主君の表情に激怒を認めて、一瞬口ごもったが、意を決したように言葉を続けた。

「すでに我々は二度、帝国軍を撃退しておりますが、今回の部隊はやや手強うございます。無理に撃退を目指さず、主星の最終防衛ラインに立てこもり、その時点で恭順の意を示されては……」

「な……何を申すか。こ、この期に及んで余に帝国軍へ降れと申すか!?」

それが降伏を提案する言葉として理解されると同時に、僅かに残っていた忍耐も寛容も一瞬にしてマクシミリアンの中から蒸発して去ったかのようだった。身を翻して指揮シートを立ったマクシミリアンは、従者の一人から鞭をむしり取る。止める暇もないままに……その余裕があったとしても、誰もマクシミリアンの制止には動かなかっただろうが……鞭が空気を切り裂く音と、部下の面上を鞭が斜めに打ち下ろす打撃音、殴打された部下がフロアに叩きつけられ転がる音とが交錯した。

「黙れ、黙れ、黙れ!! ここまで来て、恭順も何もあるものか。我らには、帝国軍を撃退し続けつつ、この宙域の諸侯領を併せて帝国より半独立する以外の道など残されてはおらんのだ。マリーンドルフ星系からは転進したが、あの艦隊さえ撃破すれば、マリーンドルフは裸も同然だ。マリーンドルフ星系が下れば、他の星系も我が軍門に下るに違いない。そうすれば、いかに帝国と言えどもおいそれと我がカストロプに手出しはできぬ。ここが我が家門の正念場だ。この期に及んで臆病風に吹かれるような者は、この手で処刑してくれ

る。良いな!?」
　フロアに斃れ、半ば気絶しているかに見える部下に、マクシミリアンは顎をしゃくった。
「連れて行け。二度と余の前に姿を現せぬようにしろ」
　マクシミリアンは指揮シートに戻る。旗艦の全天周スクリーンの中、彼らの艦隊と、先行するキルヒアイス艦隊、カストロプ星系主星の相対位置が映し出されている。見上げるマクシミリアンの緩み弛んだ頬が、さらに歪んだ笑みに輪郭を変えた。
「見ているが良い、我がカストロプ侯爵家の実力を」

　マクシミリアンの逆転勝利への自負は、なお六時間近く続いた。キルヒアイス艦隊はマクシミリアンの艦隊との距離を保ったまま刻々と星系主星に接近し、マクシミリアンもまた速度を僅かに上げたものの、無理に距離をつめようとはしなかった。途中、小惑星帯を通過したが、マクシミリアンは探査プローブすら放とうとはしなかった。先行する帝国軍が伏兵をおいているのではないか……危惧した幕僚がいないわけではなかったが、誰も進言に進み出ようとはしなかった。
　急報が達した時、すでにマクシミリアンは旗艦のブリッジにすらいなかった。あと半時間でキルヒアイス艦隊が主星の最終防衛ラインとの交戦距離にはいる位置に達し、マクシミリアンは『敵を挟撃する態勢が整ったら余を呼べ』として、遠征に際して星系主星から伴った複数の愛人たちと共に私室に籠もってしまったのだ。
　その彼の手から、既に手にしたと確信していた勝利の杯をたたき落としたのは、先行するキルヒアイス艦隊の反転を告げる一報だった。
「なぜだ……なぜ、ここで反転する。奴らは我が最終防衛ラインに背を向けて平気だというのか……」
　マクシミリアンが私室を出てブリッジに辿り着くまでの間に、さらに事態が急変する。ブリッジに飛び込んだマクシミリアンの視界を、凄まじいまでの衝撃、防禦シールドが虹色から閃紫色、さらに薄い銀色に変じていく閃きが出迎えた。
「な、何事だ――!?」
「敵艦隊後方から急速接近。距離、一〇・一光秒。後方より高温反応多数！　敵、斉射、来ます!!」
　叫びと轟音と閃光といずれが先とは判じがたかった。後方から蹴り飛ばされ、突き上げる衝撃がブリッジのフロアを揺るがせ、乗組員たちの足下をすくう。マクシミリアンもまた見事に足許を攫われ、肥満した巨体を無様に宙に舞わせた一人だった。そのまま受け身も取れずにフロアに叩きつけられ、全身を駆け抜ける激痛にマクシミリアンは恥も外聞もなく盛大な悲鳴とうめき声、涙と涎を撒き散らした。
「誰か、誰か、余を助けよ。誰か――助けてくれ、痛い、痛い!!」
　既に状況を把握する余裕すらマクシミリアンにはない。
「前方の帝国軍、最大戦速にて接近。間もなく射程に入ります」
　電子戦士官の報告もすでに耳に入らない。マクシミリアンはフロアに這いつくばったまま、頭を抱え込む。
「誰か、余を、余を助けよ」
　その口から漏れるのは戦闘への指示ではなかった。

キルヒアイスはすかさず敵の混乱に乗じた。キルヒアイス艦隊が扇を広げるように大きく展開し、無数の光の槍を投擲する。侯爵軍艦隊は大混乱に陥り、あるものは増速して前方へ逃げようとし、あるものは反転して反撃しようと試みる。またあるものは襲いかかるエネルギーの驟雨を避けようと無謀極まる転針を繰り返した挙げ句に僚艦に接触し、損傷した艦体から焔を吹き上げながら制御を喪って相互に激突、連爆の火球の中に沈み込んでいく。

不意に複数の腕に抱え上げられ、マクシミリアンは驚いて視線を上げる。鞭の痕も明らかに、赤黒くみみず腫れを這わせた男の顔が至近にあった。一瞬ぎょっとしたマクシミリアンだったが、それがかつての忠実な部下であることを思い出す。つい先ほど、彼自身が鞭を振り下ろしたことなどは都合良く、彼の脳裡からは飛び去ってしまっていた。

「お助けします、マクシミリアン様。こちらへおいで下さい。この艦はもう駄目です。脱出する以外にありません」

「余、余を助けてくれるのだな」

「はい。ここは戦場を一旦脱出し、辺境の御縁戚をお頼りになって再起の道をお探しなさいませ。わたくしめがお供いたしますでありましょう」

「わ、わ、わかった。頼む、頼むぞ。余を安全な場所へ連れて行ってくれ」

「もちろんでございますとも、さあ、こうおいでなさいませ」

男は、二人の部下に指示してマクシミリアンの巨体を抱え起こさせた。そのままブリッジから出るエレベータに運び込ませる。自らもエレベータに乗り込み、両手をドアについて、唖然とする艦橋要員たちに向かって言い放った。

「マクシミリアン卿には私がお供する。マクシミリアン卿がブリッジを出られたら、卿らは卿らの道を行け」

マクシミリアンの旗艦が機関を停止し、降伏信号を掲げたのはその一〇分後。二五〇〇に達するカストロプ侯爵軍艦隊の全艦がそれに倣うまでに一時間を要さなかった。

マクシミリアン自身は戦場から脱出したが、長らえることはできなかった。彼を『救い出した』筈の当の部下が、マクシミリアンの遺体を収めた冷凍ボックスと共に帝国軍へ投降してきたのは、その翌日のことだった。彼は『叛乱者マクシミリアン・フォン・カストロプ』を殺害した功績と、動乱に与した自らの罪の相殺を求めたが、キルヒアイスは認めなかった。

「帝国に忠誠を誓うなら最初から動乱に与すべきではありませんでした。あくまでマクシミリアン・フォン・カストロプ卿に忠誠であるつもりなら、彼を殺害して出頭するのは二重の裏切りと言うべきです。そのような人物を赦す法は、帝国には存在しないと思います」

処刑の執行はさらにその翌日。キルヒアイス自らが処刑を執行した。

「凄いな……」

統帥本部へ提出する戦闘詳報のレビュー会議で、ミハエルは思わず唸らざるを得なかった。キルヒアイスが、マリーンドルフ星系からワープ・アウトした時、敢えて後方集団だけを分離したのは、先行する前衛集団と中央集団とは異なる跳躍点にタッチダウンするた

めだった。
　マクシミリアンがカストロプ星系にタッチダウンした時、彼に先行していたのはキルヒアイス艦隊の中央集団と前衛集団だけであり、キルヒアイス自らの率いる後衛集団……主力部隊は全く別の跳躍点にタッチダウンし、小惑星帯の中に潜行してマクシミリアンをやり過ごした。先行する帝国軍を追うことのみに神経を囚われていたマクシミリアンは、後方から追尾してくるキルヒアイスに気付きようもなかったのだ。
「これは、しかし、驚きましたな」
　ベルゲングリューンは、カストロプ星系主星の最終防衛ラインの武装解除に当たっていたが、その彼を驚かせたのは防衛ラインに装備されていた兵備だった。
「連携式戦闘衛星です」
　複数の強力な戦闘衛星が静止衛星軌道上に配備され、戦闘圏内に侵入した敵艦隊を連携して攻撃するシステムで、帝国ではまだ実用化された事例はなかった。戦闘衛星自体は実用化されていたが、帝国軍や有力諸侯は、戦闘衛星で有人惑星を防衛するよりも、宇宙港路の枢要部や航行上の難所に宇宙要塞を建設する方を好んだためである。彼らの目には、小型の戦闘衛星を連ねて防衛ラインとするという考え方自体が、『貧者の戦術』であり、彼らに相応しくないものと映ったのだ。
　とは言え、カストロプ星系主星の防衛ラインは決して貧弱なものではなく、戦術上無視し得るものでもあり得なかった。
「完成したシステムではありません。完全に死角をなくすには一〇個以上の戦闘衛星が必要ですが、ここに装備されていたのは六個だけでした。ただ、そうであっても死角を突くには制式艦隊二個は最低限必要でしょう」
「シュムーデ提督もこれにやられたのでしょうね」
「可能性は高いです。あるいは地上に降りたところを上から狙われたのかも知れません。一〇〇〇や二〇〇〇ではひとたまりもなかったでしょう」
　それにしても……とベルゲングリューンが話題を振る。どうして、中央・前衛集団に最終防衛ラインの手前で反転するよう、予め作戦を立てることができたのか、と。
「マクシミリアン卿が何とかして追いつこうと速度を上げてくれれば、星系主星は既に無防備状態でしょうし、敢えて追いつこうとせず、距離を保って追尾してこようとするのであれば何らかの防衛手段が残されている。そう判断して良いと考えたのです。マクシミリアン卿の動きは明らかに後者でしたから、正体は不明にしてもカストロプ星系主星には何かがあると判断するのは容易でした。違いますか、大佐？」
「それは……確かに」
　ベルゲングリューンは再び唸った。その目から、キルヒアイスの能力への猜疑が消え、感嘆が取って代わっていることを確認し、ミハエルは安堵を覚えたのだ。
　侯爵軍艦隊が全軍、キルヒアイスに降伏し、マクシミリアンも行方不明となった状態で、これ以上の抗戦を試みようとする者はいなかった。軟禁状態に置かれていたマリーンドルフ伯フランツも、極度の疲労の中にあったが生命に別状はなく、病院船での治療の後、伯爵領への生還を果たした。伯爵令嬢ヒルデガルトが父を出迎えた

ことは言うまでもない。
さらにミハエルを驚かせたのは、キルヒアイスの戦後処理だった。
通常、有力貴族が帝国に叛乱を起こした場合、鎮圧部隊は私的な略奪を恣（ほしいまま）にするのが通例である。近年の例では、クロプシュトック侯爵による大逆未遂の事件があり、この時には鎮圧部隊を統括したブラウンシュヴァイク公が『叛逆者への制裁は帝室への忠誠の証』などと公言したこともあり、略奪と暴行は酸鼻を極めた。ウォルフガング・ミッターマイヤーが、有名な『軍規を正す』事件を起こしたのもこの時である。本人たちにとっての正義はどうあれ、『軍規を正された』コルプト子爵家出身の士官達が、下級の下士官兵から忌避の対象となったのは否定できない事実だった。
「侯爵家資産は無論のこと、侯爵家の所有に属さない一般住民の資産への掠奪は禁止。侯爵家一族を含む星系住民へのいかなる暴行をも禁止します」
星系主星への降下に際し、キルヒアイスは自ら将兵に対して布告した。過去、有形の資産は保全される例はあったが、特に叛乱首謀者の貴族一門の家族・妻妾への暴行は、帝国への叛逆に対する私的制裁として黙認されるのが普通だった。キルヒアイスはそれをも禁止したのだ。いずれカストロプ侯爵家の嫡流とされる人々は『帝室への大逆』の罪を問われて、よくて自裁、さもなければ銃殺場や絞首台への道を歩まされることになる。侯爵家はは断絶し、資産一切を没収された結果、傍流の人々も無一文となって路頭に迷うことになるのは明らかだったが、キルヒアイスは彼らが可能な限りに縁故を辿り、身の振り方を決めるだけの余裕を与えることに躊躇しなかった。
一方で、叛乱を起こした貴族一門への掠奪や暴行が、平民出身の下級士官、下士官、あるいは兵士達の不満・不平へのガス抜き、または個人的欲求への充足としての一面を持つのも否定できない。事実、『キルヒアイス提督のやり方では、下士官・兵の不満を招くのではないか』と危惧する声が、一部の高級士官からは上がっていたのだが――事実は、兵からの不満はほとんど上がらなかった。
この戦いでのキルヒアイス艦隊の戦死傷率はゼロではなかったにしても極めて低く、一パーセントにも満たなかった。
「キルヒアイス提督の下で戦えば死なずに済む」
ミハエルの耳にも入ってきたのがそうした噂だった。内乱鎮圧作戦の多くは、経験も能力もない有力諸侯出身者や、宮廷遊泳術にのみ長けた将官に指揮されることが多い。最終的に鎮圧部隊が勝利するにしても、指揮は拙劣を極め、本来避けられた膨大な量の血量が無駄に戦場に撒き散らされる例が枚挙に暇がない。ブラウンシュヴァイク公指揮下に遂行されたクロプシュトック侯領鎮圧作戦がその典型である。この戦いでは、一〇分の一にも満たないクロプシュトック侯軍に対して、帝国軍の死傷率は一五パーセントを上回ったのである。
「馬鹿なお貴族様の下で戦わされて、やっと生き延びたんだ。宝石の一つもポケットに入れて何が悪い」
掠奪と暴行の罪を問われた下士官が、処刑場に引き出された時に叫んだが、まさに彼らの気分の一端を代弁したと言うべきだっただろう。
史書に言う……下級兵士達は、彼らの上官、なかんずく高級指揮官達の有能さ・無能さを見抜くにおいて猟犬並みの嗅覚を持つもの

だ、と。彼らの嗅覚はキルヒアイスに紛れもなく類い希な有能さを嗅ぎ当てていた。有能さ、すなわち彼らを決して無駄に殺さない、指揮官として希有の能力をである。
「あの赤毛の閣下は、金髪元帥閣下並みに有能ってことだ。赤毛閣下についてきゃ、死なずに済むってことだ」
　であれば、その指揮に服すに何のためらいもない。掠奪・暴行禁止結構。せっかく戦場を生き延びたのに、軍規違反でキルヒアイスの指揮下を外されるようなことになっては引き合わないではないか。それが、鎮圧部隊に属した兵士達の共通的な感懐であり、キルヒアイスの許、カストロプ動乱鎮圧部隊が希有なほどに厳正な軍規を保ち得た背景の一つだった。

　こうして、勃発以来約三ヶ月にわたったカストロプ動乱はあっけなく終結した。キルヒアイスが艦隊と共に帝都を出撃してから、カストロプ星系主星を制圧するまでに僅かに八日。その内、帝都からマリーンドルフ星系へ達するまでが六日間であり、彼が動乱を鎮めるのに要した期間は実質的に四日間。それも戦闘が二日間で、残り二日は事後処理という、ジークフリード・キルヒアイスが、その非凡な才質を歴史に刻印した、最初の出来事である。
「自分は途方もない人物の副官になる機会を得たのだと思う」
　後日、ミハエルはウジーにそうメールしている。有力貴族や帝国軍の上層部は、マクシミリアンが弱すぎただの、単に運が良かっただけだのと様々にキルヒアイスの能力を過小評価しようとするだろう。しかし、彼ミハエルはその間近で見たのだ。後方至近に敵艦隊に迫られ、なお焦りの色一つ浮かべずに微笑んで見せた赤毛の青年の姿を。敵の探知を警戒しつつ、その背後に肉薄し、最後の一瞬に突撃命令を下す時の、むしろ物静かと言っていい命令の声を。自分が稀代の名将の、それも副官たる位置を得てしまっていることに、ミハエルは戦慄と畏怖を伴った高揚感を味わっていた。同時に、本当に自分でよいのか、この人の副官たるに自分は相応しいのかという解きがたい怯えに似た想いも胸の裡にわだかまっていた。
「ローエングラム侯、またはジークフリード・キルヒアイスの部下、または同僚になれる機会を逃すなと言ってくれたケスラー大佐に、今は心から感謝するばかりだ」
　そのウルリッヒ・ケスラーが将官の地位を得てローエングラム元帥府に加わるのは、このすぐ後のことである。が、ミハエルはこの敬すべき憲兵隊の先輩との再会を祝す機会をしばらく先延ばしにせざるを得なくなった。キルヒアイス艦隊とともに帝都に凱旋したミハエルの元に一通のプライベート・メールが配送されたのだ。
「伝えたき事あり。スケジュールを確保せられたし。場所は帝都で良し」
　差出人は、四名の連名だった。ヨハン・タウゼントシュタイン、リヒター・フェルト、ヘンリエッタ・ネーベンフラス、シュテファン・オストザイデ。いずれもラストエンテ星系の『独立派』の領袖と知られる有力者の当主たちだった。
「こいつは……行くしかないか」
　余り気は進まない。が、人類が数千の有人星系に広がった現在と言えども、帝国中央部と辺境部とを問わず、こうした人的なしがらみが極めて強いのが現在の帝国だ。かつ、ミハエルは士官学校進学

にあたって、これらの四家から資金面での援助も受けている。卒業後、門閥貴族へのコネのない彼が憲兵総監部に入り、エリート・コースとされる副官職に就けたのも、彼らの有形無形の援助あってのことである。

だからこそ、気が進まないのだ。ブルーメンタール中将次席副官の席を棒に振り、待命からローエングラム元帥府に転じることになったのが、故郷では彼ら四家とは政治的な対立状態にあるシュタインウンターブレッヒャーの一派の関係者。つまりウジー・ザーネルヘルシュテラーだからだ。ローエングラム元帥府への異動は、ミハエル自身は大変な栄転だと受け取ったが、四家の当主たちは異なる意見を持っていても不思議ではない。

「また、色々言われるんだろうな」

一方、ミハエルを別の意味で驚かせ、喜ばせたメールも届いていた。ある意味、最も受け取りたかったメールでもある。

『師匠から専門職人の試験を受けて良いって言われたよ。受験は来年になるけど、準備も兼ねて、これから店に出す商品もどんどん任せるって。わぉ、やった――って感じ。絶ぇー対っに受かってやるわ。師匠からは、よく頑張ったから、二ヶ月の休暇もやるから、一度故郷に帰って報告して来いって。今はまだちょっと時間が取れないけど、八月から九月くらいにラストエンテへ帰ろうって思う。ラストエンテのお土産が欲しかったら、予約受け付けるから、早めにね。でも、あんまり高価いものは駄目だよ』

ウジーだった。

「専門職人試験か、そいつは凄い」

専門職人試験に通れば、まず一人前の職人として世の中にも認められるし、場合によっては独立して店を出すこともできる。職人資格を持っていれば、一八歳の少女であっても銀行は比較的寛大に融資に応じてくれる。貸店舗にしても、職人資格所有が必須になっている物件が大半を占めるのだ。

受験資格は最低でも見習い職人三年の経験と、師匠資格を持つ人間からの推薦が必須だ。ウジーは今年の誕生日で見習い職人として丸三年になると言っていたが、三年目で専門職人試験を受けられる人間は滅多にいない。ウジーの職人としての資質の優秀さを示すものだろう。

「良かった。専門職人試験受験決定おめでとう。物のお土産は要らないが、ラストエンテがどんな風になってたか、土産話は聞かせて欲しい」

本音はウジーと会いたかったからというのは禁句だったが――

無論、ミハエルには知るよしもない。彼らが帝都に帰還した丁度その頃、帝国軍最大の前線基地であり、対自由惑星同盟戦の最大の戦略基地であるイゼルローン要塞。そのイゼルローン要塞が自由惑星同盟の『魔術師ヤン』の手によって失陥の憂き目を見ていることなど。